

第6章 学生支援

1. 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう学生支援に関する方針を明確に定めているか

(1) 学生に対する修学支援、生活支援、進路支援に関する方針の明確化

[現状の説明]

修士課程の修学支援については、学部生同様、各所属研究室及び教務部学務担当にて対応している。

博士後期課程については、博士後期課程運営委員会、指導教員所属研究室及び博士後期課程準備室などで対応している。

修学支援に対する方針については、特に明文化されていないが、毎年学生に配布される手帳にて、具体的な支援内容について詳述されており、新入生には4月のオリエンテーション時に説明をしている。

生活支援については、各所属研究室及び学生生活課にて対応しており、生活支援に関する方針については特に明文化されていないが、ほぼ毎月開催される教務学生生活委員会にて学生生活に係るさまざまな事項について検討されている。また、4年に1回、学生生活実態調査を実施し、学生の声を聞いている。平成18年度に実施した調査は、基本項目、経済生活、キャンパスライフ、心身の健康、情報源、キャンパスマナー、課外講座・課外活動、大学の施設、留学、卒業生の進路などについて、調査を行った。平成22年度は実施の年となっている。

進路支援については、各所属研究室（担当教員）及び就職課にて対応している。進路支援に関する方針については特に明文化されていないが、教務学生生活委員会の基に置かれている進路指導専門委員会にて適宜審議を行っている。

[点検・評価]

修士課程の修学支援については、特に明文化はされていないが、コース毎の学生数が比較的少ないため、きめ細かい指導となっている。特に博士後期課程においては、1学年の定員が6名で、2010（平成22）年度の在学学生数も17名となっており、指導教員、運営委員会により、個別の対応が可能となっている。

2009（平成21）年2月に大学院生234名を対象に行ったアンケート（以下「アンケート」という。回収数60通、回収率25.6%）の設問16「あなたの大学院指導教員についてどうお考えですか」では、a.指導教員は十分な研究指導能力があり、安心して指導を受けているが40%、b.指導教員にはまあまあ満足しているが41.7%で、合計81.7%を占めており、修学に関して特に問題はないと思われる。

設問	回答	回答数	率
16. (修士・博士課程の 両学生への設問) あなたの大学院指 導教員についてど うお考えですか。	a. 指導教員は十分な研究指導能力があり、安心して指導を受けている	24	40.0
	b. 指導教員にはまあまあ満足している	25	41.7
	c. 別の先生の指導を受けたい→設問 17 へ	6	10.0
	d. 実質的な指導は指導教員以外の先生から受けている→設問 18 へ	5	8.3
	e. その他	2	3.3
	無回答	3	5.0

生活支援については、各所属研究室及び学生生活課にて対応しており、特に明文化されていないが、教務学生生活委員会や4年に1回行われる学生生活調査の結果などについて、各部署にて必要に応じて対応を行っているが、その対応については各部署の判断となっている。

進路支援に関する方針については特に明文化されていないが、就職課にて適宜ガイダンスを行っており、適切である。

【将来に向けた発展方策】

修士課程の修学支援については、アンケートの結果、合計約75%が満足しているが、更にこの比率を高めるように、各研究室や事務における不断の努力が必要であり、方針を明確にする必要がある。

生活支援については、4年に1回行われる、学生生活実態調査を積極的に活用し、その対応についても、全体で確認をして、方針を明らかにすることが必要である。

進路支援に関する方針については就職課にて作成する資料などに方針を明確にする必要がある。また、2011（平成23）「年度から変更となる大学設置基準の大学の就業力育成を目指した教育体制を整備する必要がある。

2. 学生への修学支援は適切に行われているか

(1) 留年者および休・退学者の状況把握と対処の適切性 転学部・転学科希望に関する対応

【現状の説明】

留年については、修士課程、博士後期課程ともに、進級にあたっての条件は無く、全員が進級する。

在籍者数はコース毎では少人数のため、出席状況も把握しやすく、欠席している学生には研究室より連絡を入れている。不登校の状況にある学生から「連絡や相談があった」場合には、研究室や学生相談室で対応している。

休・退学者については、窓口にて理由を尋ねて個別に対応をしている。

退学者数については、年間数名であり、多いとはいえない。

修士課程については、造形理論・美学美術史コース以外は学部の上に修士課程が置かれている構造のため、研究室の体制が整っている。

【点検・評価】

留年者および休・退学者の状況把握と対処の適切性については、現状では特に問題は見られない。退学者のうち、学費未納と経済上の理由による退学者の割合が高いことは、学費、奨学金等について検討する必要がある。

【将来に向けた発展方策】

今後も、アンケート等を活用して、各研究室や事務における不断の努力が必要である。大学院生の学費軽減や奨学金の充実について検討の必要がある。

退学者数 ※博士の単位取得退学は含まず

退学者数 ※博士の単位取得退学は含まず集計	退学者計	修士1年	修士2年	博士※	退学理由内数 学費未納 経済上
2005年度(平成17)	9	3	5	1	(4)
2006年度(平成18)	4	2	2		
2007年度(平成19)	4		3	1	
2008年度(平成20)	7	2	5		(4)
2009年度(平成21)	4	1	3		(2)

(2) 補習・補充教育に関する支援体制とその実施 学習目的に応じた課外授業の開設

[現状の説明]

補習・補充教育については2010(平成22)年度から前期にも補講週間を設けて、休講した授業の補講のみならず研究室が行う補習に利用されている。

アンケート結果で、他大学等との単位互換については、他大学(外国を含む)、外部研究機関との単位互換を希望する学生が76%であった。これは学内の授業だけではなく、幅広い授業を受講したい学生がかなりいることがわかるが、現在TAC等の単位互換は学部生のみとなっている。

課外講座の実施については、国内外を問わず各分野の専門家を招致し全学生を対象とした課外講座を年間30件以上実施している。講師には謝礼、交通費を支給している。かつては大学全体で開催していたが、その後研究室主導の講師および開催期間決定システムとなり現在に至っている。課外講座の実施日が重なるケースがあったが、2006(平成18)年度より重複開催を避けるよう徹底している。

課外教育活動の支援として、古美術研究旅行やスケッチ旅行、ワークショップ、ゼミ合宿、施設見学、スキー教室などの課外教育活動に対し、引率者への旅費・宿泊費・施設見学費等を補助し、大学負担で参加者全員保険加入するなどの支援をしている。

また、サークル活動費を補助しているほか、年間を通じてのゼミナールやサークル顧問への一定金額の支援を行っている。

[点検・評価]

補講週を前期にも設けたことは、評価できる。

アンケート結果で、他大学等との単位互換については、他大学(外国を含む)、外部研究機関との単位互換を希望する学生が、76%であったことと、現在TAC等の単位互換は学部生のみとなっていることを鑑みて、今後に向けた対応が必要である。

課外講座及びその支援については適切である。

[将来に向けた発展方策]

今後は、学士力の向上や質の保証を担保する為にも、修士生対象の単位互換を検討し、実現することが必要である。

(3) 障がいのある学生に対する修学支援措置の適切性

ノートテイク、教材教具の工夫 サポート・ボランティア組織の育成

[現状の説明]

修士・博士課程については、これまで障がいのある学生は在籍していない。学部において、平成19年に3年次編入した聴覚障がいの学生からの申し出により、一部の講義科目にノートテイクを手配した。その時は、初めてのケースであったため、小平市のボランティアグループ「ほおづき」にお願いした。

2009（平成21）年度には、学部1年生1名、2年生1名、2010（平成22）年度は2年生2名、3年生1名の聴覚障がいの学生からの申し出があり、講義系の科目について、「ほおづき」に授業開始後の数週間お願いした。その後は学生生活課主催による課外講座「ノートテイク養成講座」を開催し、受講した学生によるボランティアを組織して、対応にあたった。

また受講している全ての科目の教員に対して、授業上の配慮についての依頼文書を作成し、特別な配慮をお願いした。

さらに2010（平成22）年度からは、学科の一部の講義系の専門科目にも対応し、大型の機械工具を使用する実習の授業についても、使用上の危険性を防ぐために、補助員を配置している。

過去においては、車椅子の学生が学部在籍していたが、現在は在籍していない。その時には、その学生のニーズにあった支援体制を学生生活課と教務課が一緒に行った。

[点検・評価]

修士・博士課程については、これまで障がいのある学生は在籍していないが、学部生において実施している内容については評価できる。

学生生活課主催による課外講座「ノートテイク養成講座」を開催しているが、受講した学生によるボランティア組織が単年度で終わってしまっているのは、残念である。

[将来に向けた発展方策]

さまざまな障がいのある学生への対応として、古い建物のバリアフリー化が必要である。特に、1、5A、7、8、10号館へのエレベータ設置が急がれる。

学生生活課主導で「ノートテイク」を確保するためには、ボランティア意識の醸成を高め、いつでも対応できるようにすることが必要である。

(4) 奨学金等の経済的支援措置の適切性

[現状の説明]

大学院博士前期課程（修士課程）の収容定員は112名で在學生は209名である。これまで修士課程固有の奨学金制度はなかったが、2009（平成21）年度より、80周年記念武蔵野美術大学大学院修士課程奨励奨学金制度をつくり、年額50万円を3名に贈与することとなった。

博士後期課程の収容定員は18名で在學生は18名である。入学時の申請に基づき、授業料の半額が奨学金として全員に支給されている。

学内奨学金としては、武蔵野美術大学奨学金（以下、大奨という）は、本学独自の奨学金制度で、人物・

学力が優れ、経済上修学困難な造形学部及び大学院修士課程の留学生を除く学生を対象とする奨学金である。授業料の半額（592,500円）を修士生に給付(贈与)している。

2006（平成18）年度より採用者数を、大学院前期課程生19名とした。成績も前年度1年間の成績を評価対象とし、新入生については評価対象を入試成績に改めた。

学外奨学金は、日本学生支援機構奨学金を84名が受給している。〈2009（平成21）年度〉

この他に、民間の奨学金を若干名が受給している。

①私費留学生への経済支援

留学生の大半を占める私費留学生への経済的支援は次のとおりである。

・授業料減免制度

一定の成績以上の場合、授業料の上限3割を減免する。（1年次生は適応なし）

（年により基準とする成績や採用人数、上限3割までの配分は変動）

・奨学金

（学内奨学金）

武蔵野美術大学私費外国人留学生奨学金（年額30万円×6名）

武蔵野美術大学高井幸子奨学金（年額25万円×2名）

（学外奨学金）

私費外国人留学生学習奨励費（日本学生支援機構）（年額78万円×5名）

文部科学省国費外国人留学生（国内採用）（月額博士15.7万円、修士15.6万円）

その他民間団体奨学金

②交換留学生（受入）への経済支援

協定校からの交換留学生は協定に基づき学費は全額免除している。また、交換留学生1名が、本学が日本学生支援機構へ申請した短期留学推進制度の奨学金を受給している。

奨学金以外では、交換留学生の宿舎について本学が借り、費用の一部も本学が負担し、交換留学生に安価に提供している。同宿舎には、日本人学生12名を常駐させ、日本での充実した留学生活が送れるよう配慮している。授業においても、授業理解が深まるよう日本人学生をチューター（有給）として配置し、サポートしている。

アンケートによると、親からの支援は82%が受けている。その他の収入として、アルバイトは70%、奨学金は43%が受けている。

[点検・評価]

アンケートの結果からも、70%がアルバイトをしているということは、親からの支援だけでは十分でないことがわかる。十分な学習、研究の時間を確保するためにも、奨学金の充実が必要である。その中でも、平成21年度から、10年間の限定ではあるが、80周年記念募金事業で武蔵野美術大学大学院修士課程奨励奨学金制度をつくり、年額50万円を3名に贈与することとなったことは、評価できる。また、武蔵野美術大学奨学金も修士課程生の受給率を増やしたことも、評価できる。

大学院生227名のうち43名が留学生で全体の19%を占めているが、文部科学省からの授業料減免制度が以前は5割であったものが、現在は3割となっている。昨今の経済状況を考えると、留学生にとっては、かなりの学費負担であると思われる。

アルバイトとしてTAはいろいろな面で有益であるが、学生全体の27%にとどまっていることは、増やす方が必要である。

[将来に向けた発展方策]

奨学金については、原資の問題もあり、簡単に増やすわけにもいかないが、学費の体系が学部と同じになっており、明細について検討し、大学院生の負担を軽減することを検討する必要がある。

TAについては、予算措置が必要となるが、経費の全体見直しを図り、例えば非常勤講師の部分をTAに切り替えるなどすれば、対応が可能である。

アンケートの記載で『ムサビの学部からの優秀な学生が他大学（芸大、京都市芸etc）の院へ進学してしまうケースが多いと思う。特に学費等の金銭的な面から。聞いたところによると、芸大などはたださえ学費が安い上に、芸大の学部から院へ進学すると、多くの学生が更に学費が半額くらいになるらしい。優秀な学生を確保するためには、カリキュラムや指導教員の充実を計ることは重要だが、まずは学費の高さがネックになって、本学の院への進学を諦めている学生も多いと思う。また、在籍している学生のレベルが高いかどうかということも、大学院選択の重要な要素だと思う。優秀な学生（修了者）が多い大学院に魅力を感じる希望者も多いと思う。』とある。

他大学の状況を調査し、大学院については、学費の体系を検討する必要がある。

奨学金給付・貸与状況（2009年度実績）

奨学金の名称	学内・学外の別	給付・貸与の別	支給対象学生総数(A) (院生数)	在籍学生総数(B)	在籍学生数に対する比率 A/B*100	支給総額(C)	1件当たり支給額C/A
日本学生支援機構奨学金	学外	貸与	1,473 (84)	4,464	33.00	587,208,000	398,648
交通遺児育英会奨学金	学外	貸与	1 (0)	4,464	0.02	720,000	720,000
武蔵野美術大学奨学金	学内	給付	125 (13)	4,435	2.82	74,062,500	592,500
私費外国人留学生奨学金	学内	給付	6 (0)	151	3.97	1,800,000	300,000
私費外国人留学生学習奨励費	学外	給付	43 (8)	151	28.48	9,960,000	231,628
佐藤国際文化育英財団奨学金	学外	給付	2 (0)	4,435	0.05	720,000	360,000
守谷育英会美術奨励金	学外	給付	2 (1)	4,435	0.05	1,350,000	675,000
守谷育英会奨学金	学外	給付	1 (0)	4,435	0.02	1,200,000	1,200,000
口ータリー米山記念奨学会奨学金	学外	給付	1 (1)	151	0.66	1,680,000	1,680,000
平和中島財団外国人留学生奨学金	学外	給付	1 (0)	151	0.66	1,200,000	1,200,000
長谷川留学生奨学財団奨学金	学外	給付	1 (0)	151	0.66	960,000	960,000
朝鮮奨学会奨学金	学外	給付	1 (0)	4,435	0.02	900,000	900,000
武蔵野美術大学校友会奨学金	学内	給付	6	4,237	0.14	1,200,000	200,000
武蔵野美術大学高井幸子奨学金	学内	給付	2	108	1.85	500,000	250,000
杉村奨学金	学内	給付	1	4,237	0.02	100,000	100,000
よんでん文化振興財団奨学金	学外	給付	2	4,237	0.05	1,800,000	900,000
岐阜県選奨生奨学金	学外	貸与	1	4,237	0.02	1,152,000	1,152,000
石川県奨学生	学外	貸与	1	4,237	0.02	49,200	49,200
山口県ひとつくり財団奨学生	学外	貸与	1	4,237	0.02	612,000	612,000
国際瀧富士美術賞	学外	給付	1	4,237	0.02	300,000	300,000
橋本修英奨学金	学内	給付	1	209	0.48	100,000	100,000
岡井奨学金	学内	給付	1	209	0.48	100,000	100,000
根岸奨学金	学内	給付	1	209	0.48	100,000	100,000
三雲祥之助賞	学内	給付	2	209	0.96	200,000	100,000
清水多嘉示賞	学内	給付	2	209	0.96	200,000	100,000
飯田三美賞	学内	給付	2	209	0.96	200,000	100,000
三林亮太郎賞	学内	給付	2	209	0.96	200,000	100,000
前田常作賞	学内	給付	2	209	0.96	200,000	100,000

- [注] 1 2009年度実績をもとに作表すること。
2 学部・大学院共通、学部対象、大学院対象の順に作成すること。
3 当該奨学金が学部学生のみを対象とする場合は、「在籍学生総数」欄には学部学生の在籍学生総数を、大学院学生のみを対象とする場合は、大学院の在籍学生総数を記載すること。
4 日本学生支援機構による奨学金も記載すること。

3. 学生の生活支援は適切に行われているか

(1) 心身の健康保持・増進および安全・衛生への配慮 保健管理センター、学生相談室の整備・充実

生活相談室利用状況

施設の名称	専任スタッフ数	非常勤スタッフ数	週当たり開室日数	年間開室日数	開室時間	年間相談件数			備考
						2007年度	2008年度	2009年度	
学生相談室	5	3	5	200	12:30 ～ 17:00	380	391	504	専任=教員5名、 非常勤=医師1名、 資格を持ったカウンセラー2名

[注] 1 専任、非常勤ごとに、スタッフの種類（医師、資格を持ったカウンセラー、教員、職員等を備考欄または欄外に記載すること。）
2 年間相談件数は、延べ数を記載すること。

[現状の説明]

本学の在学生は2009（平成21）年5月1日現在4,467名でそのうち、修士課程は227名である。教職員は非常勤を含めると（1,063）名、計（5,530）名に及ぶが、これら構成員の健康管理を2005（平成17）年度まで保健室は嘱託2名、臨時1名（月、木、土）で行っていた。また、校医3名の勤務日数はそれぞれ月1回である。

授業時間は5限が午後5時50分までである。一方、教育・研究のための施設使用は最大午後10時まで延長が可能である。また、課外活動のための施設使用も最大午後10時まで延長が可能である。そのため、保健室が閉室となる午後5時以降に、体調の不調を訴えたり、外傷などで治療を必要とする状況が時々発生する。対応について学生手帳には医療機関の案内を載せる、予め救急病院リストを研究室・守衛室へ配付し、守衛室との連携で救急車の手配、近隣病院への連絡が速やかに実施できるようにするなどの方策がとられてきた。平成18年度より開室時間を午後8時まで延長し、嘱託職員1名が増員された。

保健室には内科医、精神科医、産業医が、学生相談室には精神科医、臨床心理士及び教員が配置されており、医師の治療が必要と思われる学生に対しては、精神科医、臨床心理士より病院を紹介している。

学生相談室の利用者は年々増加傾向にある。その内訳を見ると臨床心理士の担当する曜日に8割近くが集中し、日によっては10人以上の相談もあり、心の悩みを抱える学生が多いということがわかる。相談者の男女比についてみると、女子学生比率が約8割にのぼっているが、学生の男女比も同等の為、性別の違いによる相談の多寡は特でない。精神科医担当日は勿論、特に臨床心理士担当日には、予約が集中する状況であり、平成18年度からは週4回の開室とし、学生のニーズに応えられるよう改善を図った。表45以前の相談室利用者延べ数を見てみると、2004年度は240で、246、295と増えてきて、2007年度からは380、391、504と増加している。

[点検・評価]

数字は、大学全体のものとなっており、大学院生については、特に数字はでていない。相談室利用者数は実数ではなく、延べ人数なので、実人数は150名程度であるが、こここのところの延べ人数の増加は、明らかに心の病を負った学生が増えていると考えられる。学内での対応者を増やしていることは評価できるが、ここ5年で、倍の数になっていることを考えると、十分とはいえないだろう。

[将来に向けた発展方策]

相談室利用者数の増加に対応するために、人材、空間等十分に検討し、対応する必要がある。内部での対応以外にも、外部の機関と契約し、窓口を広く設ける必要もある。

(2) ハラスメント防止のための措置 専門相談員の配置、調査・審査会の設置

[現状の説明]

セクシャル・ハラスメントに対してはセクシャル・ハラスメント防止ガイドラインを設け、セクシャル・ハラスメントを防止し、被害が生じた場合の公正な救済を保障することで、適正な教育・研究・就労環境の実現に取り組んでいる。毎年全学生及び教職員に「相談の手引き」を配付し、周知徹底をはかっている。

アカデミック・ハラスメントなど他のハラスメントについても同じ窓口で受け付けているが、規則上の明文化はされていない。

[点検・評価]

制度が導入されたときには、教授会でも時間をとって説明を行ったが、それ以降、おこなわれていない。事例があるなしに関わらず、定期的実施する必要がある。

現行規則はセクシャル・ハラスメントを定義しているが、職場環境としては、その他にアカデミック・ハラスメントやパワーハラスメントなど、多様である。教育機関としてアカデミック・ハラスメントについて定義することは必要である。特に大学院においては、各コース毎の人数が少ないため、構造的にアカデミックハラスメントの起こる背景は十分にあると思われる。

[将来に向けた発展方策]

2003（平成15）年に制度を導入して、7年経つが継続的に講習会などを開催し、啓蒙を続ける必要がある。アカデミック・ハラスメントやパワーハラスメントなどについて早急に定義する必要がある。

4. 学生の進路支援は適切に行われているか

(1) 進路選択に関わる指導・ガイダンスの実施

(教員へのアンケート問10. 卒業後の大学院生の進路指導についてを参考にする。)

[現状の説明]

次は、2005（平成17）年度～2009（平成21）年度の修士課程修了者の進路を示す表である。（グラフも参照のこと）

美術専攻

年度	修了者数	就職希望者数	就職者数	進学者数	その他 (作家活動等)	就職率	修了者に対する 就職希望者数の率
2005	50	23	19	4	27	82.6	46.0
2006	48	19	16	2	30	84.2	39.6
2007	51	24	17	3	31	70.8	47.1
2008	58	12	10	5	43	83.3	20.7
2009	54	21	17	3	34	81.0	38.9

デザイン専攻

年度	修了者数	就職希望者数	就職者数	進学者数	その他 (作家活動等)	就職率	修了者に対する 就職希望者数の率
2005	38	20	17	2	19	85.0	52.6
2006	45	16	12	4	29	75.0	35.6
2007	37	20	17	1	19	85.0	54.1
2008	58	32	24	2	32	75.0	55.2
2009	49	26	11	2	36	42.3	53.1

進路選択に関わる指導・ガイダンスについては、各所属研究室と、就職課が対応している。就職課では就職についてが中心となり、研究や、作家活動、進学などは主に各研究室が対応しており、キャリア全体としての組織的位置づけは明確ではない。

平成22年度実施、カリキュラム委員へのカリキュラム点検評価アンケートによると各研究室での進路に対する考え方は、独自のカリキュラムと対応をしている研究室、まったく就職課に任せている研究室、それぞれ個別に対応している研究室など、様々である。

進路についての指導教員の考え方は、設問10.「卒業後の大学院生の進路指導について、どのように考えておられますか。」の回答に示されている。（修士課程）においては、「学生によって就職先（就職日程）は多様、また留学を希望し帰属を決めない学生も少なくない。個別の対応が求められている」、「将来の希望が多様で対応が難しい」という認識の下で、大別して二通りの対応がなされているようである。一つの対応は、「学生の自主性にまかせるべき」に代表され、他の対応は「就職希望の学生の活動に協力する。現実として修了後の進路も含めての個別指導となっています」に代表されるように、「1年次から対応しています。インターシップも含めて。」や「卒業生からの情報提供や、希望があれば企業の紹介など行っている」との回答

があった。作品制作が中心となるコースでは、「制作環境のアレンジを個別にアドバイスする」など「作家活動のサポートをできるだけしたい」、或いは、「作家活動を継続して取り組むことを根幹として、進路を考えて欲しいと思う。」と考えており、デザイン系では、「デザイナー・編集者などの高度職業人。博士課程への進学。」を目指す指導、教職や学芸員の場合には、「セミプロとして活動できる力を持った学生に対しては、後期課程進学または、専門職員（学芸員など）への道を指導する。」等、博士後期課程への進学が指導される場合もある。

（博士後期課程）においては、博士の学位が意識されるが、「作家として自立するように（まずは博士論文を書き上げて欲しい）」という認識や「プロとして独立できる手形として、学位取得を目指させる。」という位置づけをし「それが不可能な場合は専門職員などへの道を指導する。」とした回答があり、「博士になった場合はそれなりの就職先や発表形態を整えてやるべきだと思う。」と積極的な支援を行うことが必要とする考えや、他分野の博士号取得者と同様に「教育者、あるいは高等教育機関で教員をしながら研究や制作を続ける。デザインの場合には修士と同様の高度職業人も考えられる。」との認識を示すものがあった。

修士・（博士後期課程）共通に、入試の段階で「意志の確認が必要である。専門職への就職は難しい。」とし、「本人の希望を聞いて、出来るだけ具体的に指導 - 例えば留学・大学に残る又はフリーで作家としてやっていくなど」、現在は個別対応せざるを得ない状況であると思われる。

院生に進路に関する見通しを尋ねた設問では、次のような回答を得た。

27. 進路についての見通しはどうか (複数回答可)。	a. 作家・フリーデザイナーとして活動をしようと思う	29
	b. 希望する進路は見つかると思う	23
	c. 希望する進路は困難だと思う	16
	d. 就職したくない	4
	e. どこへ就職すればよいかわからない	12
	f. まだ考えていない	1
	g. 職場に復帰する	1
	h. 転職する	0
	i. その他	7
	無回答	1

学生へのアンケート「Q28：進路に関して、指導教員あるいは専攻（コース、領域）に対する要望があれば書いて下さい。」によると、次のように、活発な意見がだされており、指導を希望する学生、しない学生、様々であるが、少なくとも希望している学生が満足するように、対応することが必要である。

- *より会社で活動・活躍できるように、実践的な教育が行われるべきである。例えば就職や仕事の相談を必ずして進路を具体的に決めて欲しい。作品や論文だけの指導はただゴミにすぎない。
- *進路指導をしてほしい／進路について指導教員以外にも相談にのってほしい／研究室からも進路に関する情報やオリエンテーションを開いて欲しい／進路について気さくに話せる場が欲しい／OB・OGの情報などが欲しい／研究室も就学・就活について興味を持って欲しい。
- *作家志望の学生がほとんどを占める専攻で、作家のなり方などというものが無いのは分かりますが、せめて色々なパターンの話をもっとするなどの姿勢を見せて欲しいと思います。とても具体的に言いますと、教員が信用をおいているギャラリーの人を紹介するなどして欲しいです。ちなみに私は自発的に聞いているため、個人的には満足しています。

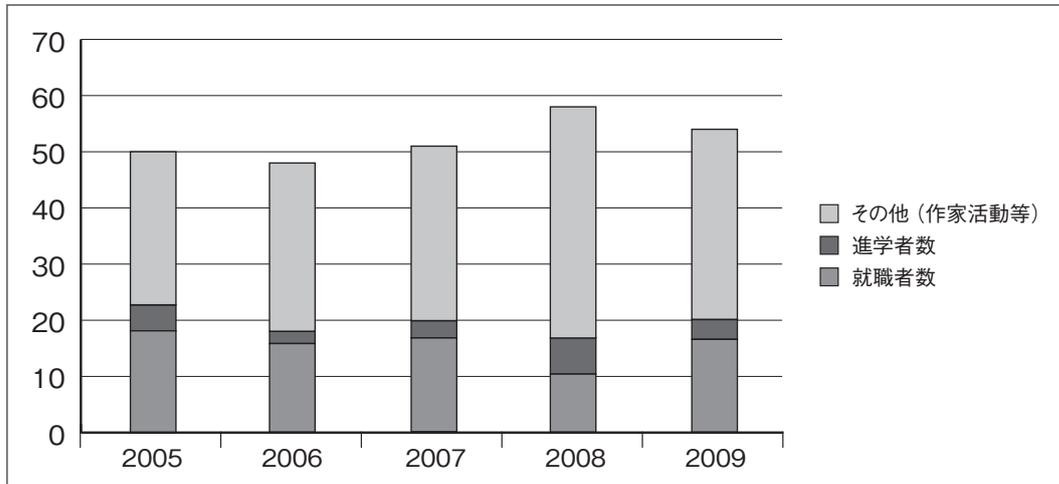
- * 指導教員に頼る必要も、頼りたいとも思いません。
- * 学部生なども含めて、自分の専攻するコースの先輩などがどのような経緯で進路を決めたのか動機などのデータ・意見を見てみたい。
- * 就職に対してのサポートがあまりない／作家としてやっていくためのアドバイスも少ない／現実的に作家としてやっていく上で必要とするをもっといろいろな作家を呼んだりして、考える道を広げ現実的にしてほしい。
- * 進路に関して結局、指導教員に相談などは出来ませんでした。もう少しそういった事に関しての話し合いなどの機会があったりしたら、卒業してからの今後に役立ったのかもしれないと思います。結局何も決まりませんでした。
- * 進路は自分で切り開くものだと思うので、特になし。よく説明してくれているし、色々な進路の現場との関わりもつくってくれていると思う。
- * 作家一筋の先生だけでなくもっと社会経験豊富な先生もいると助かる。色々な経験の話がきけるので。進路についても相談できる視野の広い先生もいるとよい。
- * ムサビの学部からの優秀な学生が他大学（芸大、京都市芸etc）の院へ進学してしまうケースが多いと思う。特に学費等の金銭的な面から。聞いたところによると、芸大などはただでさえ学費が安い上に、芸大の学部から院へ進学すると、多くの学生が更に学費が半額くらいになるらしい。優秀な学生を確保するためには、カリキュラムや指導教員の充実を計ることは重要だが、まずは学費の高さがネックになって、ムサビの院への進学を諦めている学生も多いと思う。優秀な学生が他大学へ流出していると思う。また、在籍している学生のレベルが高いかどうかということも、大学院選択の重要な要素だと思う。優秀な学生or修了者が多い大学院に魅力を感じる希望者も多いと思う。
- * やはり指導教員が『ここは（他の大学のように指導教員の元で）研究するところではないので、自分で見つけるしかない』という姿勢が逆によくはない状況になっていると思う。
- * 先生が学生に対して、就職先などを教えてほしい。
- * 専攻の仕事（制作）をできる職の斡旋があればよいと思う。就職する場合や制作を続けるにしてもまったく支援等ないのは残念な気もしました。
- * 幅広い意味でアートや（絵など）ものづくりで社会とつながり、経済的に自立する方法。もしくは実例などを学び実践できる場がほしい。そういうことも制作と共に学んだり、やってみたい。

就職課での指導・ガイダンスについては、学部生同様に修士生についても行われている。また、1年次夏季休暇期間にインターンシップ・プログラムを実施している。

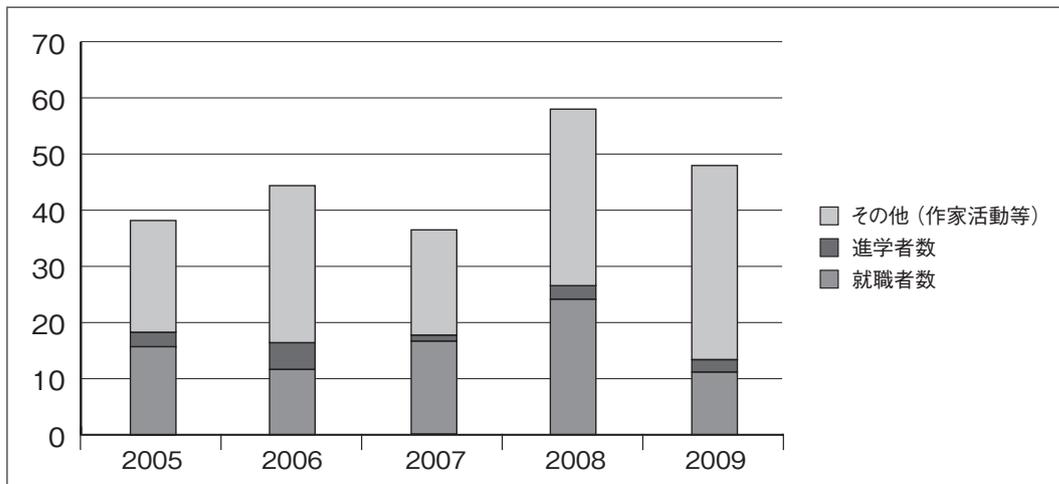
学生全体としては、アンケート結果では、就職に対して、研究や作家を希望する学生の比率が48%となっている。

美術専攻とデザイン専攻を比べると美術専攻の就職希望者は少ないが、就職率はそれぞれ大きな違いはない。デザイン専攻の学生の就職希望者の比率は多いが就職率はコース毎ではばらつきがあるものの、平均としてはまずまずといえる。なお、修士の学生数（母数）が少ないため、数字の変動は大きくなってしまっている。また指導教員へのアンケートからは、全体として就職に対して指導教員が何らかの関わりをもつ必要があるとの考え方がみえてくる。

美術専攻



デザイン専攻



[点検・評価]

学生の進路支援の適切さとして、進路選択に関わる指導・ガイダンスの実施、就職については、就職課が組織として適切に対応している。就職課では就職についてが中心となり、研究や、作家活動、進学などキャリアとしての組織的位置づけは各研究室での対応となっている。資格保有者としてのキャリアアドバイザーは1名配置されている。大学院においては、約半数が研究や作家志望であることを考えると、就職課だけでなく、研究室等、大学全体での対応、広い意味でのキャリア教育が必要である。

[将来に向けた発展方策]

指導教員へのアンケートからも、大学全体としてキャリア教育に対して、本学独自のものを策定する必要がある。

教育単位ごとではなく、大学（院）全体として情報発信の戦略的計画を明確にし、それに沿ったかたちでの外部に向けた発信が必要と思われる。また、学生アンケートの要望を吟味し、必要に応じて実現する必要がある。

(2) キャリア支援に関する組織体制の整備**[現状の説明]**

本学では、就職課が組織として対応している。就職課では就職についてが中心となり、研究や、作家活動、進学などキャリアとしての組織的位置づけは明確ではない。資格保有者としてのキャリアアドバイザーは1名配置されている。大学職業指導研究会等の各種外部研修に参加し就職課員の研鑽に配慮している。

就職課は次の就職支援業務を行っている。

- ・卒業修了年次生対象の進路調査・統計の作成（「就職ガイドブック&資料集」）
- ・求人先の開拓（企業来訪対応、学外での求人喚起等）
- ・職業選択の支援・助言＝課員による個人面談
- ・情報の収集・整理・管理・提供
- ・求人情報ファイル等各種情報提供、PC（ID パスワードによるWEB 経由の検索を含む）による情報検索、「進路インフォメーション誌」の発行、企業内定実績者のポートフォリオ（作品集）の閲覧
- ・進路ガイダンス、進路・就職講座、職種研究会等の実施
- ・学内会社説明会
- ・インターンシップ（単位認定はなし）等のキャリア育成業務（受け入れ先確保、募集説明会開催、参加希望受付、選考、実施先訪問を含む対応、参加学生による報告会、体験記の印刷物作成等）就職以外の研究や、作家活動については、各所属研究室（担当教員）にて対応している。

[点検・評価]

2011（平成23）年度から大学設置基準が一部改正となり、「大学における社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）の法令上の明確化」が示された。

改正の趣旨として「大学は、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の内外を通じて社会的・職業的自立に向けた指導等に取り組むことが必要であり、そのための体制を整えるものとし、（略）」次のように設置基準に明文化した。「大学は、当該大学及び学部等の教育上の目的に応じ、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携を図り、適切な体制を整えるものとする。」

これを受けて、本学ではどのように対応するか、カリキュラムについては、現在カリキュラム委員会等において検討中であるが、2011（平成23）年度後期からキャリア設計基礎（2単位）を開設することになった。組織については検討をしていない。

[将来に向けた発展方策]

本学ではどのように対応するか、現在カリキュラム委員会等において検討中であるが、単に就職だけを考えたガイダンスではなく、本学独自の入学から卒業、そして生涯を通じたキャリア教育について検討することが必要である。

これにあわせて、大学設置基準の趣旨をよく考え、組織として現在の就職課をキャリアセンター等への名称変更とその体制について十分に検討しなければならない。また2011(平成23)年度後期から開設されるキャリア設計基礎の授業についての検証も行う必要がある。

(3) 学内施設設備について

[現状の説明]

学内の施設設備については、第3期自己点検・評価報告大項目7で詳細にとりあげている。ここでは大学院生を対象としたアンケートの結果を中心にまとめる。

アンケートの「問21：所属するコースの設備・環境についてどう思うか」を尋ねている。その結果、満足していると、やや満足しているが47%、満足していないが52%となっている。

そのうち、満足していない内容としては、スペースが狭い21%、工房や教室が学部生と共有だから16%、機材が少ないから20%、施設利用時間が短いから20%、その他23%となっており、その他の内容は次のような意見であった。

- *パソコン機材が貧しい。
- *それ以前の問題を多々感じる。
- *大学院のアトリエは広くてよいが、使いたい時に色々な道具など（木工、彫刻、印刷など）を気軽に行える場があるとよいと思う。既にあるものなら他学科の学生でも気軽に使えるような少し自由なシステムがあったら良いと思う。
- *使用時間は一任してほしい（入構禁止以外）。
- *アトリエの場所を変えてほしい。
- *油絵コースは大部屋で、音や粉塵の出る工具を使えない。外で制作しようにもいたるところをたらい回しにされ、昨年の授業期間はほぼ学内の引越しに費やした。外でテントを張っていたら工事で掘り返されていて、ペンキもひっくり返っていた。お金を弁償してほしい。工事をしすぎ。学生は望んでいない！
- *学外から来た場合や、技術を学びなおしたい場合は不便です。
- *工房の休暇期間があまりにも長すぎます。
- *2号館401、501の大アトリエは使い勝手が悪いです。
- *5号館にエレベーターなし。
- *大学院の工房では専攻の技法を使わせてもらえないから、今は学部のアトリエを使っている。
- *研究するのに2ヶ月間も図書館の休みは長すぎる。整理する必要性は分かるが、せめて1ヶ月間程度にすべき。他の大学の図書館と比べればよくないことがわかる。
- *ゼミ費のような研究費が支給されないので、研究の幅が狭まる。
- *学部と共有したいものもある。また、学外から来た場合や技術を学びなおしたい場合不便。

- *研究室に気に入られるかどうかで、施設利用可能度の差が激しい。
- *特定ゼミの学生だけ使用する感じだから、他ゼミは使用できない。
- *なぜ、彫刻などあんなにも広いのに建築はあんなに狭いかわからない。となっている。

また、教員へのアンケートでも、次のような意見がでている。

「問8. 現在、学生に不満があるとしたら、どのような点だとお考えですか。」に対する抜粋として

[修士課程]

- *院生のための部屋がない。研究設備。工房が自由に使えない。
- *院生の研究制作環境（施設と設備）。特に他大からの学生は、学部時代の大学と比較し、院生の環境は悪いと皆発言している。早急に改善が必要です。
- *アトリエスペースが少々狭いと思っているのでは。
- *現在、彫刻学科の大学院専用の工房は1教室で、個人のスペースはデスク1つのみである。これは工房を学部生と共同で使用している理由からであるが、学外からの受験生からは奇異に感じられるはず。
- *大学院工房が狭いこと（現在の1.5倍～2倍必要）。
- *設備関係、教室の個々のスペース。
- *施設の不足。
- *十分な個別指導を受ける環境が整っていない。
- *授業料が授業時間数と施設（デザインは施設が必要ないので）に見合わない（高い）。
- *何度も申し上げています。何よりも個人スペース。（現状はひとり一台の机も確保できません）。
個別研究内容で必要となるコンピュータの性能と数の確保。
アトリエ（制作スペース）として活用できる制作スペースの不在。
他大学からの入学希望者の多くは「つくる場」、「描く場」があることをムサビに求めて受験してきます。（受験生の事前調査不足と言えればそれまでですが。）

以上、学生、教員ともにスペースと設備について、不満がでている。

修士課程の各コース毎の使用面積は60頁の参考資料のとおりとなっている。2号館の竣工により、日本画、油絵、版画の専用面積はそれぞれ1人あたり20㎡をこえた。彫刻では、機材類は学部生と共用となるため、5㎡となっている。

これに対して、デザイン専攻の映像学科では2㎡、空間演出の8㎡、造形学の9㎡と、10㎡未満となっているがこれらは彫刻同様に工房等を学部生と共用で使用している為である。

博士後期課程については、2号館に322㎡のアトリエ、9号館に32㎡の演習室の他、準備室として100㎡ある。アトリエについては、ファイン系を中心とするが、部屋に余裕がある場合には、他の領域の学生も使用できることとなっている。

[点検・評価]

スペースについて2号館の竣工により、美術専攻の日本画、油絵、版画、彫刻については、教室の再配当を行った。これにより、上記のように美術系では、まずまずの面積となっている。これに対してデザイン系の演習室では、おおむね1コースあたりに1部屋の配当となっており、1人あたりの面積は数字の上では十分とは言えないが、工芸工業デザインコースや映像コースのように、工房や設備を必要とするコースでは学部生と同一の設備を使用することとなっている。現在のところ、完全に院生用に設備を備えているところは、版画コー

スのみとなっている。

設備については、必ずしも学部生と院生を分ける必要は無いが、少なくとも使用にあたって不便でない空間が必要である。コンピュータの不足については、早急に対応する必要がある。

また、アンケートの要望を分析し、対応できることから対応する必要がある。

[将来に向けた発展方策]

明らかに、デザイン系を中心として、修士の学生へ演習室の整備が必要である。東京都が進める都道小平3・3・3号線により学内施設の再編を行う際には、その事を十分視野に入れる必要がある。ただ、その際には、これまでのように単にコース毎の部屋を作るのではなく、博士のように、教育目的の達成を目指し、研究交流、他分野の刺激を受けることができるように、コースを横断的にした共用演習室と共用工房等を作ること等の検討が必要である。

問10. 卒業後の大学院生の進路指導について、どのように考えていますか

【修士】

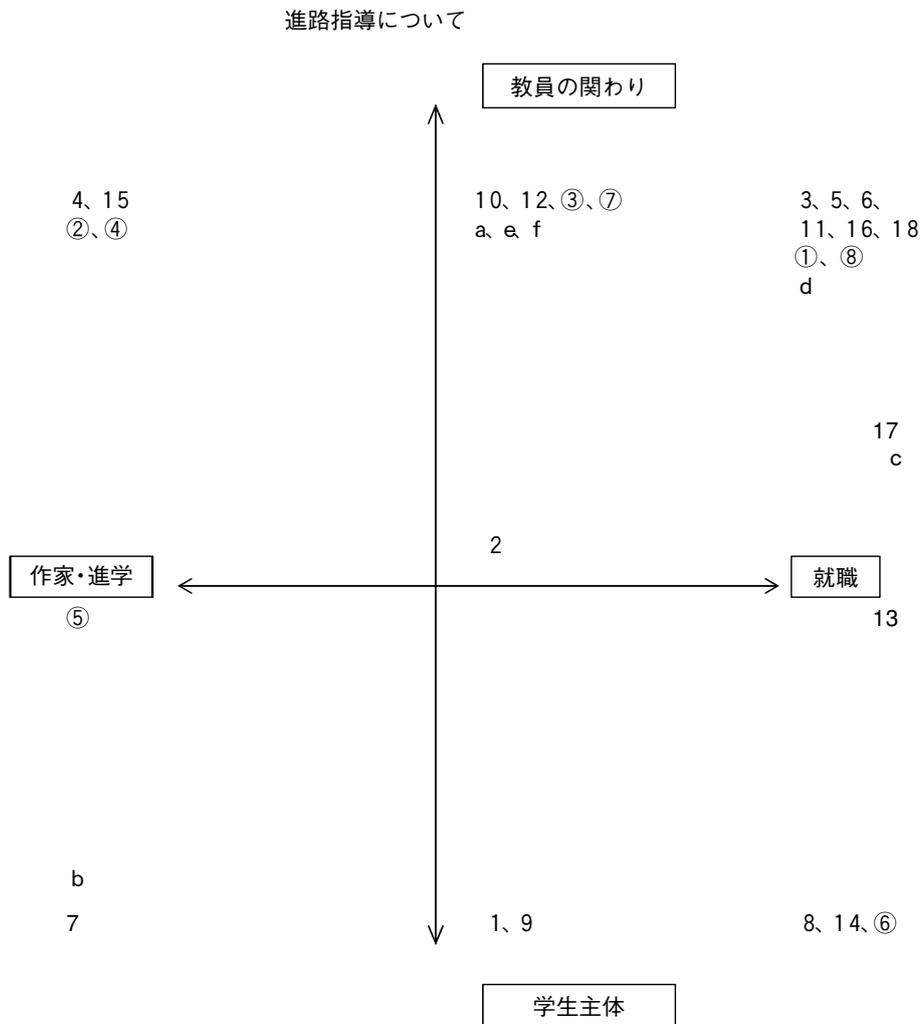
- 1 *学生の自主性にまかせるべき。
- 2 *特に考えていない。
- 3 *就職希望の学生の活動に協力する。現実として修了後の進路も含めての個別指導となっています。
- 4 *制作環境のアレンジを個別にアドバイスする。
- 5 *1年次から対応しています。インターシップも含めて。
- 6 *専門家一私の場合は専修免許状を持つ教員一の養成。
- 7 *創作を続けるのみ。
- 8 *ドラマ作りもまた才能の世界である。進路は自ら切り開く他はない。
- 9 *当該コースの学生の力のレベルは多様であるから、専門職を目指す場合もそれに至らない場合もある。
- 10 *学生によって就職先（就職日程）は多様、また留学を希望し帰属を決めない学生も少なくない。個別の対応が求められる。
- 11 *卒業生からの情報提供や、希望があれば企業の紹介など行っている。
- 12 *将来の希望が多様で対応が難しい。
- 13 *デザインの場合にはデザイナー・編集者などの高度職業人。博士課程への進学。
- 14 *博士への進学は勧めない。各自の就職活動。
- 15 *作家活動のサポートをできるだけしたい。
- 16 *母体である、視覚伝達デザインのデザイナーや作家となる事はもちろんですが、本学科の修了生は私も含め、教育の現場に携わる傾向が強くあります。本学科の教務補助、助手、他大学や本学の非常勤講師になるという学生達が多くいます。留学生でも現在助手のパク君、以前助手だったユンさんは名古屋造形大学の専任講師に、ソン君は中国で大学教員、韓国の大学からの研究員ミンさん、シンガポールの大学の学科長も務めたヘレンさんなど、本当に優秀な人材が輩出されています。また、WEBやIT関係、映像などの新しい領域でも貴重な人材を輩出しました。現在彼等が携わる社会にこそ、新しい将来展望があるかもしれません。どの学生達とも改めてしっかりとネットワークを繋ぐ工夫が必要だと痛感します。
- 17 *資料を提出させ、卒業後の現状を把握する。
- 18 *卒業生の中から数名を、授業の中で特別講師として招聘し在學生に対して講義あるいはディスカッションの場を作る。

【博士】

- ① *博士になった場合はそれなりの就職先や発表形態を整えてやるべきだと思う。
- ② *作品発表の戦略を個別にアドバイスする。
- ③ *専門性が高いので二人三脚で主指導の力が問われるでしょう。
- ④ *自立した研究者の養成。
- ⑤ *作家として自立するように（まずは博士論文を書き上げて欲しい）。
- ⑥ *教育者、あるいは高等教育機関で教員をしながら研究や制作を続ける。デザインの場合には修士と同様の高度職業人も考えられる。
- ⑦ *資料を提出させ、卒業後の現状を把握する。
- ⑧ *卒業生の中から数名を、授業の中で特別講師として招聘し在學生に対して講義、あるいはディスカッションの場を作る。

[全体]

- a * 学生本人の希望に応じて対応しているつもりです。4年生よりも更に深刻なテーマだと認識しています。
- b * 最終的には作家を目指して欲しいのですが、修了時には何らかの就職をされることを期待しています。
- c * 資料を提出させ、卒業後の現状を把握する。
- d * 卒業生の中から数名を授業の中で特別講師として招聘し、在学生に対して講義あるいはディスカッションの場を作る。
- e * 本人の希望を聞いて、出来るだけ具体的に指導－例えば留学・大学に残る又はフリーで作家としてやっていくなど。
- f * 入試の段階で意志の確認が必要である。専門職への就職は難しい。



大学院生 進路集計 2005～2009 (平成17年度～21年度)

コース	年度		修了者	就職希望者	就職者	進学者	その他 (作家活動を含む)	就職率 (就職者/希望者)
日本画コース	21	2009	12	4	4	2	6	100%
	20	2008	7	2	2	0	5	100%
	19	2007	9	5	5	0	4	100%
	18	2006	8	3	3	1	4	100%
	17	2005	5	1	1	2	2	100%
油絵コース	21	2009	20	8	7	0	13	88%
	20	2008	21	3	3	2	16	100%
	19	2007	18	7	6	1	11	86%
	18	2006	15	6	5	0	10	83%
	17	2005	14	7	4	0	10	57%
版画コース	21	2009	6	2	2	0	4	100%
	20	2008	5	1	1	0	4	100%
	19	2007	10	7	3	0	7	43%
	18	2006	8	1	1	0	7	100%
	17	2005	8	4	4	0	4	100%
彫刻コース	21	2009	13	5	4	1	8	80%
	20	2008	12	2	2	0	10	100%
	19	2007	9	4	3	1	5	75%
	18	2006	11	7	5	0	6	71%
	17	2005	9	3	3	1	5	100%
造形理論・美術史コース	21	2009	0	0	0	0	0	—
	20	2008	7	1	0	2	5	0%
	19	2007	1	0	0	1	0	—
	18	2006	2	0	0	1	1	—
	17	2005	7	1	0	1	6	0%
芸術文化政策コース	21	2009	17	17	17	17	17	100%
	20	2008	6	3	2	1	3	67%
	19	2007	4	1	0	0	4	0%
	18	2006	4	2	2	0	2	100%
	17	2005	7	7	7	0	0	100%
美術専攻 計	21	2009	68	36	34	20	48	94%
	20	2008	58	12	10	5	43	83%
	19	2007	51	24	17	3	31	71%
	18	2006	48	19	16	2	30	84%
	17	2005	50	23	19	4	27	83%
視覚伝達デザインコース	21	2009	4	3	1	0	3	33%
	20	2008	5	4	4	0	1	100%
	19	2007	4	0	0	0	4	—
	18	2006	3	1	0	1	2	0%
	17	2005	6	0	0	0	6	—
工芸工業デザインコース	21	2009	4	4	0	0	4	0%
	20	2008	11	4	3	1	7	75%
	19	2007	9	7	5	0	4	71%
	18	2006	11	7	6	1	4	86%
	17	2005	3	1	1	1	1	100%
空間演出デザインコース	21	2009	6	4	3	0	3	75%
	20	2008	7	5	2	0	5	40%
	19	2007	2	1	1	0	1	100%
	18	2006	5	2	2	0	3	100%
	17	2005	7	5	3	0	4	60%
建築コース	21	2009	14	10	6	0	8	60%
	20	2008	10	6	4	0	6	67%
	19	2007	4	3	2	0	2	67%
	18	2006	6	0	0	0	6	—
	17	2005	4	4	4	0	0	100%
基礎デザイン学コース	21	2009	1	1	0	0	1	0%
	20	2008	5	2	2	0	3	100%
	19	2007	5	4	4	0	1	100%
	18	2006	7	2	1	1	5	50%
	17	2005	5	4	4	0	1	100%
映像コース	21	2009	7	2	0	1	6	0%
	20	2008	7	4	3	1	3	75%
	19	2007	10	4	4	1	5	100%
	18	2006	10	3	2	1	7	67%
	17	2005	8	3	3	1	4	100%
写真コース	21	2009	6	2	1	0	5	50%
	20	2008	3	0	0	0	3	—
	19	2007	2	1	1	0	1	100%
	18	2006	—	—	—	—	—	—
	17	2005	—	—	—	—	—	—
デザイン情報学コース	21	2009	0	0	0	0	0	—
	20	2008	4	3	3	0	1	100%
	19	2007	1	0	0	0	1	—
	18	2006	2	1	1	0	1	100%
	17	2005	5	3	2	0	3	67%
デザイン専攻 計	21	2009	42	26	11	1	30	42%
	20	2008	52	28	21	2	29	75%
	19	2007	37	20	17	1	19	85%
	18	2006	44	16	12	4	28	75%
	17	2005	38	20	17	2	19	85%
大学院修士課程 合計	21	2009	110	62	45	21	78	73%
	20	2008	110	40	31	7	72	78%
	19	2007	88	44	34	4	50	77%
	18	2006	92	35	28	6	58	80%
	17	2005	88	43	36	6	46	84%
コース	年度		修了・単位 取得退学	就職希望者	就職者	進学者	その他 (作家活動を含む)	就職率 (就職者/希望者)
博士後期課程 造形芸術専攻 (単位取得退学を含む)	21	2009	7	0	0	1	6	—
	20	2008	6	4	3	0	3	75%
	19	2007	9	0	0	0	0	—
	18	2006	7	0	0	0	7	—

平成23年1月現在

大学院生（修士）使用面積

コース	合計面積	学生数	1人あたり面積	建物名	室番	名称	細区分	面積
日本画	475.85	22	21.6	5A号館	202	(日本画) 大学院アトリエ	日本画	94.44
				5A号館	203	(日本画) 大学院アトリエ	日本画	96.3
				6号館	211	(日本画) 大学院アトリエ	日本画	97.28
				6号館	212	(日本画) アトリエ	日本画	187.83
油絵	968.55	44	22.0	2号館	401	油絵大学院アトリエ	油絵	485.12
				2号館	501	油絵大学院アトリエ	油絵	483.43
版画	397.06	16	24.8	2号館	510	版画大学院 Studio	版画	188.44
				2号館	511	版画大学院 Studio	版画	208.62
彫刻	111.05	22	5.0	2号館	311	彫刻工房	彫刻	111.05
造形理論・美術史	53.74	6	9.0	12号館	711	造形学院 1,2	院造形 1,2	26.87
				12号館	712	造形学院 1,2	院造形 1,2	26.87
芸術文化政策	111.46	8	13.9	9号館	608	大学院	芸文	111.46
視覚伝達デザイン	92.16	11	8.4	10号館	303	視覚演習室	視覚	92.16
工芸工業デザイン	106.32	25	4.3	8号館	201	演習室 (教務共用)	教務 (工)	106.32
空間演出デザイン	92.16	11	8.4	10号館	204	空テ3	空テ	92.16
建築	167.94	24	7.0	8号館	311A	コンピュータ室 (建築)	建築	129.9
				8号館	311B	コンピュータ室 (建築)	建築	38.04
基礎デザイン学	46.08	14	3.3	10号館	407	基テ	基テ	46.08
映像	30.24	19	1.6	7号館	303	個人研究室	映像	30.24
写真	58.74	9	6.5	12号館	502	サウンドアトリエ	映像	58.74
デザイン情報	91.51	0		9号館	415B	大学院 D.I.L	予情	91.51
美術専攻								
デザイン専攻								
合計	2802.86	231	12.1					